



新型コロナウイルスについての臨床心理学的一考察：
「対称性」と「バランス」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 幸治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017387

新型コロナウイルスについての臨床心理学的一考察

—「対称性」と「バランス」—

高橋幸治

1. コロナで筆者に生じたこと

2020年2月、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大を防ぐために、様々な学会、イベント、行事の中止や延期が決定され始めた。筆者にとって、初めてこのウイルスが身近に感じられた時期である。その後、感染は広がり、緊急事態宣言、大学生の大学入構禁止、オンライン授業、テレワーク、Zoomでのケースカンファレンス、不要不急の外出自粛、3密を防ぐ生活、外出時にはマスク着用など、これまで体験したことのないことをすることになった。

筆者は、渓流釣りを趣味にしている。7月に釣仲間川原稔久先生と長良川に日帰りの釣りに久しぶりに行った。山あいを通る支流の川原に立ち上がった時、私は愕然とした。私の脚は震え、川の水の流れに対して恐怖を感じた。しっかりと立てない、歩けない。私は、自分の身体が今この場に全くマッチしていないことを感じた。大きな岩に腰かけ、しばらくじっとしていた。いつもは、川や山に入ると、身体の中の毒が出て、きれいな空気が全身にめぐりような気持ちのいい体験をしていてそれが好きだったので、このようなことは初めてだったし、ショックだった。しばらく経つと、身体がだんだんなじんできて、釣りをできるようになってきた。その日は、午前と午後で8時間くらい歩きながら釣りをした。運動不足だったので、脚や腰が疲労困憊したが、すがすがしい気分だった。ただ、腰が痛すぎて、帰りの長時間の車の運転ができるか、少し心配になっていた。身支度を終え、私と川原先生は、支流の上流部にある温泉に入ってから帰ることにした。その温泉がとても気持ちよく、入った後、腰の痛みがかなり癒えたことに気づいた。ほかほか、じんじんとする温泉の効き目を身体に感じながら、車を走らせながら、私は川原先生と今日のことを話しながら、来月のある企画について決意していた。それは、毎年8月に大学の臨床仲間へ声をかけ、山散策やテントキャンプに行っていて、今年はコロナの状況下で実施できるか未定のままだったのであるが、なんと行かなくても行かなければならない、と強く感じたのである。知らず知らずのうちに、私の身体は蝕まれていた。自然から離れ、自然を恐怖する状態になっていた。そして恐ろしいのは、そのことに全く無自覚であったこと

だった。自然の中に身を運ぼう、身体を動かし疲れよう、そして人と話そう、コロナのリハビリをしようと考えた。

そして8月、コロナ感染のことを考慮しながら、7人で日帰りの登山に行った。距離をとり、いろいろな話をしながら山を登った。運動不足の人が多く、脚や身体に配慮しながらみんなで登れるように休憩し、表情を確認し合っていた。汗をたくさんかき、風を感じながら、登った。そして頂上で弁当を食べた。帰りには、温泉に入った。後で、女子風呂にまで私の笑い声が聞こえていたことを知らされた。その後、立ったまま距離をとり、地ビールと串揚げを美味しながら、会話を楽しんだ。ケースカンファレンスもZoomで行っていたので、皆と顔を合わすのも話すのも私は久しぶりだった。私はこの日、とても大切なことを体験したと感じていた。またこの7月と8月の体験を始めに、新型コロナウイルスの影響の中で生活していくうちに、なんらかのコンステレーションに気づくようになった。本論文では、それらの体験のコンステレーションを眺めながら、新型コロナウイルス感染症についてコロナ禍の人間について、身体的臨床心理学的に考察することを目的とする。

2. コロナはどこから来たか

2020年4月28日の毎日新聞で、霊長類学者の山極寿一氏が新型コロナウイルスについて書いている記事(山極, 2020)に出会った。そこでの山極の主張は、エボラ出血熱、SARS(重症急性呼吸器症候群)、MERS(中東呼吸器症候群)といったウイルス感染症と同様に、新型コロナウイルスも由来は野生動物、中でもコウモリが感染源だという説が多いこと、コウモリから他の野生動物を経て人に感染した可能性がある、ということであった。コウモリ自体はウイルスに感染していても発症することはなく、感染を繰り返しながら他の動物や人に感染しやすい性質を持つようになるという。さらに、近年になって上記のウイルス感染症の発生が増えている背景に、森林伐採によって原生林に開発の手が入り、これまで接触のなかったコウモリと野生動物が同じ樹で出会うようになってしまった、つまり動物たちの動きが制限されて接触し、感染経路が広が

たことについて指摘している。同様に、人間もまた、森の中に道路を作り、森林伐採や野生動物狩猟のために森に入り、都市で売りさばくという自身の移動と、感染した野生動物を出荷するという一方で、感染の拡大に影響したと言う。これらの説が有力だとすると、新型コロナウイルスの元凶は我々人類にある、ということになる。コウモリ自身では発症しないでおとなしくしていたウイルスを自分たちに引き寄せたのは人類自身であるということである。

山で釣りをしていると、人間の愚かさを痛感することがよくある。山の広葉樹を伐採し杉ばかりの（日本には、山の本を伐採し建材としての杉やヒノキを植林してきた歴史がある）森を流れる川、護岸工事されている川は、雨が降るとすぐに増水し、水が土の色になり濁る。反対に人の手が入っていない森を流れる川は、そんな時でも増水もしないし、濁りもでない。山に住む人の話によると、広葉樹の根が張り巡らされている森の土は雨が降っても保水する力があって、そのまま川に流れ込むことがないからだ、と言う。数日かけて、チョロチョロと川に注ぐので増水しないし、土も流れ込むことにならないわけである。自然の川や森、山は実に見事な仕組みで存在しているが、人間がそれを壊している。これに関する実験がある。C.W.ニコルは黒川紀章との対談（2001）で、カナダの原生林の水源の研究をした仲間がいて、原生林を伐採する以前には水源に降った雨が海にたどり着くまで1週間かかったのが、原生林を伐採した後ではたった2時間しかかからなかったということを紹介している。森の保水力は、土砂崩れや水害とも関係していることは想像がしやすい。また、釣りに行って、川のそばに住んでいる人達に話を聞いたり、書物を読むと、昔は魚がもっといた、天然のウナギが毎日獲れた、堰ができる前はサツキマスがもっとたくさん遡上していたというような、人の手が入ることによって川の豊かさは失われているということはよく耳にする。

人間は、生活の便利さや金儲けのために自然を都合のいいように利用したり改変してきた。新型コロナウイルスは、そのことに端を発している。そして、前述したようにコロナの影響での生活の変化によって、筆者の身体は自然から離れ、その危機感から自然を求めている。自然を破壊することによってコロナは生まれ、その影響下で自然を求め、これは一体どういうことなのか？

これと類似した問題に9月にNHKのテレビ番組^{註1)}で偶然に出会った。直木賞を受賞した馳星周氏へのインタビューを扱ったコーナーだった。馳氏は、これま

で都会を舞台とした暴力や悪を描くノワール小説を数多く著してきたが、今回は『少年と犬』という全くイメージの異なる作品を描いた。そこでは、とても賢い犬が登場する。多聞という名のその犬は、西の方角に移動し続けるのだが、その途中で様々な人と出会う。泥棒だったり、関係が冷えた夫婦だったり、娼婦だったり、老人だったりする。多聞は、出会う人の苦しみを理解し、寄り添い、救う行動をする。それぞれの人は言葉を発さない多聞と対話をし、信頼関係を作っていく、という作品である。馳氏自身が11年連れ添った愛犬の最期を看取ったことが大きいと語られていた。番組では、馳氏にとっての愛犬の大きさを「(犬は)人という愚かな種のために、神様だか仏様だかが遣わしてくれた生き物なのだ」という作品の言葉で表現していた。さらに、馳氏が自身が変わったきっかけについて、「今は本当にすべてが過剰で、食べるものも消費も何もかも過剰で、そんなに食わなかったって死なないだろうっていうのに食う。そんなスマホみても死なないだろうというのを見るとかね。なんでも過剰な世の中になっていると思うんだけど、このままだと環境破壊も含めていつか破たんするだろうかと、多分みんな思ってるんじゃないかと思うんです。それを今、新型コロナでいろんなことがストップしたときに問われているんじゃないかと思えますね。本当にいまのままでいいのかと。～」と語っていた。馳氏には、新型コロナの影響下で、犬と人とのつながり、その信頼関係を描きたくなる内的なムーヴ（動機）が生じていたのだろうと想像をする。

人間が自然を破壊するプロセスでコロナを引き寄せた、その禍の中で、人は自然や動物を求める。「本当にいまのままでいいのかと」。馳氏の心のムーヴは、表現内容や影響力は全く違うが筆者のムーヴと同じ型なのではないかと考えられる。「内的なムーヴ（動機）」という言葉は、筆者が河合隼雄の事例研究論をまとめる際（高橋、2014）に出会い、注目するようになったものである。河合（1992）は、事例研究では一般的な法則としての知が伝わるのではなく、個々の事実を超えて発表者の内的体験が語られ、それを受けた参加者や読者の心に、感動や高まり、勇気といったものが生じ、それにより本人の臨床実践になんらかの動きを生む、ことを指摘した。その動きを内的なムーヴ（動機）と表現し、人によって個性的な内容になることも重視している。つまり、コロナの影響の中で、馳氏と筆者には、自然や動物を求め、その意義を味わいたくなる内的なムーヴ（動機）が生じたということである。

3. 「対称性の論理」から

筆者が山に入り、それまでに体験したことのなかった恐怖を感じ、その後それが快に変わり重要な意味に気づいたり、都会の暴力や悪を描いていた馳氏が動物との絆についての作品を描く変化を示すことは、人と自然、人と野生との関係性に関連していると考えられる。ここで、中沢新一の「対称性の論理」について紹介する。中沢は、『カイエ・ソバージュⅠ～Ⅴ』で、壮大な論を展開している。ここでは、主に『カイエソバージュⅡ』（中沢、2002）と『～Ⅴ』（中沢、2004）を参考にする。そこでは2001年9月11日にニューヨークで起こった同時多発テロ事件についての人々の表現や、当時ヨーロッパや日本で起こっていた、狂牛病や口蹄疫への問題意識が発端の一つとして挙げられている。狂牛病は、本来母牛の乳と草を食べる牛に、共食いとも言える牛の内臓や骨から作った肉骨粉という動物性飼料を与える自然の摂理を無視したことから始まっている（中村、2001）。それによって発した狂牛病が広がらないように沢山の牛を殺すことになった出来事である。

中沢（2002）は、人類の歴史の中で、まだ王や国家が生まれる前の我々の祖先である現生人類の神話的思考を重視している。そこでは、「人間と動物との間に超えることのできない溝などはなく、共に同じ言葉を語り、結婚することもできた、ということ述べ、人間と動物の間や人間同士の間には、「対称的」関係が築きあげられていた、と言う。人間が動物に対して一方的に優位な立場に立ったり、権力が人々の上の有無を言わさぬ力をふるったりすることは起こらない仕組みができあがっていた。また、人間は「文化」を持ち、動物たちは人間が触れられない「自然の力」の秘密を握っているとされ、人間は神話や儀礼を通して動物たちと絆を作り、「自然の力」の秘密に触れようとしていた、と論じている。このように、人と動物、文化と自然、人と人が対等の立場でつき合う、異なる存在を乗り越えようとするを「対称性の論理」と中沢は名づけたのである。例えば、狩猟民が動物を捕らえる場合でも、自分たちに必要な分以上の狩猟をすることが掟として固く禁じられていたり、自分たちが殺した動物たちのからだを丁寧に尊敬をこめてあついていた。しかし、国家というものが生まれると、この対称的な関係が崩れ、非対称性の論理ができあがる、「相手が動物であれ、人間であれ、その相手のことを『野蛮』であると決めつけたり、それに比べて自分たちはなんて『文明的』なんだろうとうっとり」（中沢、2002）する非対称的な関係ができた、と述べている。

動物、自然に対して、人間の都合だけで管理する、コントロールしようとするのである。この非対称的な関係で満ちた現世で、対称的な関係、対称性の論理に光を当てようとしているのが、中沢の執筆の原動力であると読み取れる。

対称性の論理が可能となる背景に、中沢は人間の心の構造に注目している（中沢、2004）。まず、我々の祖先の現生人類と時代的にその前のネアンデルタール人の間に、革命的な脳組織の変化が起こっていると述べている。ネアンデルタール人の脳は、現生人類よりも大きく、高度な技術をもち、意志伝達体系としての言語を喋っていたが、大きく現生人類と異なるのは、象徴的思考ができなかったのではないかと、ということである。その根拠として、装飾品や宗教的遺物がないこと、無意識が豊かに発達する未熟期間が短いこと、に加えて、認知考古学の仮説を引用している。それは、人間の脳をコンピューターに喩えて、脳には、言語的領域、社会的領域、技術的領域などいくつかの小部屋に分かれ、それぞれ特化した活動を行うが、小部屋間の連絡通路がないために、思考を横断的に結ぶことができなかったということである。一方、現生人類では、その小部屋同士を相互につなぐ新しい回路が実現されていたというわけである。中沢は、その異質な領域を横断していく様子を、「流動的知性」と名づけ、重視している。この流動的知性によって、比喩表現や象徴表現が可能になるわけである。例えば、「嵐のような一日が過ぎたなあ」という表現に、「今日はずっと晴れていたから、嵐ではなかったよ」と返答する場合、天候としての「嵐」を比喩的に理解できるかどうか問題となってくる。また犬の行動から対話していると実感したり、信頼感を感じたりすることも、この流動的知性が大きく関係していると考えられる。例えば、犬が「ワン」と言った、スリッパを加えてきた、という言葉をも、「それだけ」と終わらせるのか、犬の意志を想像したり、心を通わせることが可能になるのは、特化した領域を扱う各部屋を横断する流動的知性の問題である。中沢は、この流動的知性には無意識が深く関係をし、赤ちゃんの未熟な状態での長期間にわたる養育者との関係によって養われるということについても言及している。

少し横道にそれるが、筆者はこの「流動的知性」を参考にし、教育現場での教員研修である企てを実施している（高橋、2017）。それは、問題のある生徒への関わりについて、具体的な事例を使って考えるワークの途中で、全く関係ない「好きな物語を一つ思い浮かべ、他者と共有する」というワークを行うのである。

このワークが成功すると、教員は夢中になって自分の好きな物語を語り、耳を傾けるといふ光景が広がる。その後で、さきほどの問題のある生徒の事例に再度取り組みと、変化が生じる場合がある。最初の事例を考える時には、「この生徒は〇〇障害ではないか」といふような客観的態度だったのが、物語を思い浮かべるワークの後には、「自分にできることはなにか」「生徒はこれまでどんな家庭で生きてきたか」「問題を起こすのも理由があるのではないか」と生徒に近づき、主観的、主体的な態度になっていく、という場合がある。物語を思い出し、語る、聴くといふことで、ある知性（流動的知性）が刺激され活発化していき、問題を起こした生徒のことに上下関係、客観的關係でなく、対称的な関係、自分と同じ人間である、そのような問題に至った背景があるはず、自分にできること、いふように先生方の態度が変わるのである。私は、この時には「流動的知性」を「物語的知性」と言い換えて、使っている。人の心には、様々なものが複雑に存在し、物語に近づくことで、物語的知性がムクムクと湧きあがってくるという現象がある。「物語的知性」には、教師が生徒を客観視してコントロールする非対称的な関係から、教師が生徒に近づき自分のこととして、相手の物語と自分の物語を大切にす対称的な関係に移行させる力があると考えている。これはまた先述した内的なムーヴ（動機）とも深く関係していると考えられる。ともに、一般的な法則や知識ではなく、個人にとっての個性的な自身の物語と関係した心の高まりが生じて、個人の今後の生き方に影響するといふ特徴がある。

中沢（2002）は、9.11の事件が起こった後に書いた言葉を『カイエソバージュⅡ』のエピローグに記している。「しかし人間が非対称の非を悟り、人間と動物との間に対称性を回復していく努力をおこなうときにだけ、世界にはふたたび交通と流動が取り戻されるだろう。このように語る知性ははたして無力なのだろうか。それとも、それを現代に鍛え上げていくことから、世界を覆う圧倒的な非対称を内側から解体していく知恵が生まれるのだろうか。いずれにせよ、狂牛病とテロが、対称性の知恵をもういちど私たちの世界に呼び覚まそうとしていることだけは、たしかである」と。それから19年が経っている。今回の世界規模の新型コロナウイルスの猛威もまた、対称性の知恵を私たちに呼び覚まそうとしているのであろうか。その知恵、知性をどのように鍛えていくことが求められているのだろうか。

4. コロナがつきつけているもの

新型コロナウイルスによって、我々の生活は大きく変化した。感染しても無症状の場合がある、といふのがこのウイルスの大きな特徴の一つといえる。本人もそのそばにいる人も、感染していることに気づかずにいる、いふ状況が起こり得るわけで、それが恐ろしいところでもあり、ウイルスの立場からいふと、生き残るため、仲間を増やすためには非常に効果的なわけである。感染先の生物がすぐに症状がでて休養をとったり、すぐに亡くなってしまつては、ウイルスは広がらない。無症状で元気で活動を続けてもらうこと、他者とたくさん接触してもらうことは、ウイルスにとって有り難い。だから、人間は、外出や移動、会合の自粛、他者との接触を減らすといふ方針を立てる。

疫学的知見から立てられた方針は、感染を抑えるためには最善の策なのだろう。しかし、一方でいろいろものを壊している。「そばにいる人が感染者かもしれない」といふ疑心暗鬼によって、咳をできない緊張感が生まれ、マスクをしなない、マスクの付け方が悪いと犯罪者扱いといふ雰囲気ができあがり、ルール通りにしない人を責める心が自然と起こる。筆者自身も自分がそのようになり愕然とすることがある。マスクをしていない、マスクから鼻がでていふ人について目がいてしまう。昨年の3月頃までは、自身もマスクをするのが嫌いだったにも関わらずである。また、人と会つたりでかける約束をする際にも、「自分や他者どちらかが感染しているのでは？」とか「感染が少ない地域に行き、自分が感染源になってしまつては申し訳ない」といふ思いで、ぎくしゃくする。自分にとっての異物、自分の中の異物を排除する心が生じる。冒頭の7月に釣りに行く前の自分は、ちょうどそのような心が極まっていたのかもしれない。新型コロナウイルスの影響下で暮らすことで、筆者は自然や人に対して非対称的な姿勢を知らず知らずのうちにとっていたのかもしれない。それが、川とマッチしてない身体を自覚した背景なのだろう。しかし自然との対称性の関係を結ぶような体験が、筆者自身を癒したのだと思われる。

3月末頃、「夜の飲食店には行かないように」といふ要請が出て二週間後、テレビで北新地のバーの様子が映し出されていた。その当時でも、夜の飲食店は閉める店が多かつたはずである。初老のマスターが、「この2週間で、今そこに座られていふお客様が初めてのお客様です」と言つていた。客は、「こつう頑張つていふ店で飲まないとね」といふカウンターで飲んでいた。マスターは、ネクタイをしめて、「北新地の灯を消してはいけなないと思つていふんです」と言つて、シャイ

カーをかつこよく振っていた。筆者はそれを見て、「この人はコロナなんて関係なく生きている。生きがいのためなら死んでもいいと思ってるんだろなあ。でもこれが人間だよな」と思った。カッコいいと思った。だが同時に、「世間から迫害されるけど」とも思った。飲食店への制限は、その後厳しいものになってきている。

お酒や食事を楽しみながら、ワイワイ騒いだり、少人数で静かに語り合ったり、それが楽しいと感じる時は、人が他者と対称的な関係をむすぶ時でもある。飲み食いするので、マスクを外すことになる。この対称的な関係の瞬間が、今最も制限されている営みの一つである。コロナウイルスは、この営みにストップをかけているわけである。しかし、人間と動物の対称的な視点で見れば、人間が野生動物に対してしたことは、店ごと、街ごと、住処ごとブルドーザーで修正不可能なほどにぶっ壊し、皆殺しにしたとも言うことができるわけである。対称的な視点で見れば、である。

新型コロナウイルスによって、他者を疑い、自分を疑い、排他的になり、「会わないでおこう」という方針をとり、他者との飲食の機会が奪われ、人と人との対称的な関係の実現が困難になってきている、と言うことはできるだろう。

5. C.W.ニコル

C.W.ニコルという人がいる。2020年の四月にこの世を去った。5月頃、テレビで偶然に見た番組で、亡くなる6日前に英字新聞で発表されたコラムが紹介されていた^{註2)}。「生命体はあまねく すばらしい競争のなかにあります カモシカと草 カモシカとライオン アリとアリクイ 食べる側 食べられる側の間にある競争はウイルスも同じです ウイルスから私たちが身を守るには まずは免疫を付けることです その上で感染者を隔離する努力は当面は必要でしょう しかし強制を伴う隔離は 長く続けることができません そうしたなかで私たちに今 求められているのは『バランス』なのです」と。この彼の「バランス」という言葉の意味を探ってみる。

以下、『日本まさに荒れなんとす』(2001) というC.W.ニコルと黒川紀章の対談を参考にする。ニコルさんは、英国サウスウェールズ生まれで、北極調査や環境問題に携わり、作家活動もしている人で、1962年22歳の時に初めて日本を訪れ、和歌山県の鯨捕りの町に住んで小説を書き、日本が大好きになり、ついには1980年に長野県黒姫に永住するようになる。ニコルさんは、黒姫の豊かな森、自然に感嘆したそうで

ある。しかし、その直後から急激に樹齢400年以上の樹が何千本も伐採されるようになり、動物たちも姿を消すようになってしまうことに直面した。彼は行政に文句を言うが事態は変わらないので、自分で荒地を買い取り、そこに森を再生することを決意する。元木こりの人を雇い、彼から木について、森について学び、二人で調査をし、木を植えたり、池を掘ったり、間引いたりすることを始めた。そこでは、多様な種類の木を間隔をとり光が入るように植えていった。「昔のような原生林には戻すことはできないと思うけれど、それに近いものにして残したい」という思いだった。そして、今では、たくさんのお木々、植物、鳥たち、虫、動物が暮らしていると言う。ツキノワグマの親子がハチミツを食べにきたり、珍しいヤマネやフクロウが住み着いてくれたことを喜んでいる。この森は「アフアの森」と名づけられている。アフアというのは、ニコルさんが生まれた地域と同じ名前の森があり、そこにちなんでいる。ウェールズのその地は、100年以上前は石炭産業がさかんで、樹木は伐採され、山は石炭くずで覆われ、川も汚れた状態だった。ある日豪雨が降り、土砂崩れで学校が埋まる出来事があり、それをきっかけとして1938年に地元の人々が林業委員会を設立し、荒廃した土地に森を植え始めた。様々な樹木が植えられ、丁寧に育てられ、今では、豊かな森となり、野生動物が住み、谷間を流れるアフア川には、マスやサケの釣りが楽しめる、と言う。ニコルさんは、生まれ故郷で先人が行った偉業を日本の黒姫で実現してくれたというわけである。私が8月に日帰り登山をした夜、帰宅しテレビをつけたら、このニコルさんの特集をNHKで放映していたのに出くわした。そこでは、幼い頃級友にいじめられていたニコルさんに、彼のおばあさんが、森に行き、これだと思ふ木に抱き着きなさい、そうしたら木から元気をもらえる、という教えを得ていた、と言うことが語られていた。著書(C.W.ニコル, 1991)では、祖母の言葉を「あの谷間に行ってください。ひとりだけで行って、年とった大きな木を見つけるんだよ。できればオークの木がいい、オークの木は魔法の木だからね。これだと思ふ木を見つけたら、その木に向かって、兄弟になってくれと頼むんだよ。その木をしっかりと抱き締めて、木が鼓動するのを感じとり、自分の秘密をうちあけて、そのかわりにその木の秘密を教えておもらい。それがすんだら、てっぺんまで登って、その木の呼吸を吸い込むんだよ。そうすれば、木はおまへの兄弟になって、おまへを守り、強い子にしてくれるからね」と紹介している。テレビ番組では、ニコルさんは、障害児や被虐待

児を森に招いて、話をしたり、木登りをしたりしていた。目に障がいのある子ども達が、木を触り、木に登り、どすんと背中から落ち葉が積もった地面に落ちてしまったりしていたが、彼らの表情は生き生きとしていた。ニコルさんは、妖精のようなおばあさんの血を受け継ぐ、対称性の論理そのものを生きる、森と人の再生人のような人であった。

ニコルさんにも、対談をしている黒川紀章にも共通しているのは、人間が自分のことだけを考えて、自分の都合だけで、自然を破壊する、他の生き物や植物を殺していたら、人間も死ぬことになるという考えである。また黒川（黒川・C.W.ニコル、2001）は、自身の考える「共生」の定義を以下のように挙げている。「①対立・矛盾を含み、競争・緊張の中から生まれる刺戟的で創造的な関係を言う。②お互いに対立しながらもお互いを必要とし、理解しようとするポジティブな関係を言う。③いずれの片方だけではとうてい不可能であった新しい創造を可能とする関係を言う。④お互いの持つ個性や聖域を尊重しつつ、お互いの共通項を上げようとする関係である。⑤与え・与えられる大きな生命系の中に自らの存在を位置づけるものである。」というものである。さらに、「共生」は調和や妥協とは異なる概念と強調している。調和は「差異あるものが平和裡にバランスよく存在している状態」であり、妥協は「二者の間に利害の対立はあるが、それによって創造的な新しい関係をつくり出そうとはしない」ということである。「共生」は、調和や妥協とは違って、対立、矛盾、競争、尊重を伴う創造的な概念だと考えられる。黒川は、ニコルさんとの対談によって以下のことを確信したと述べている。「自然との共生を可能にするには、何よりもまず人間が自然の持つ無限の情報に耳を傾けなければならない。科学技術から得られた知識だけではなく、自然の中に存在する偉大な智慧にも教えられる人間の感性が必要である」と。ニコルさんが亡くなる6日前に書いた文の「生命体はあまねくすばらしい競争のなかにあります」という言葉、森を再生する際に、一つの種類の木を植えるのではなく、多様な木を植えることを重視していたこと、とも黒川の言葉は重なっていると考えられる。食べる・食べられる関係でさえ「大きな生命系の中に」位置づけられることなのだろう。ニコルさんの言った「バランス」とは、異なるもの、多様なものが、競争をしつつ、対立しながらも必要とし合い、それによって新しいものを創造する、という高度なバランスなのだろう。ニコルさんの「バランス」は、黒川の「共生」とも重なるわけで、つまり、「平和裡に存在する」調和でもな

く、「新しい関係をつくり出そうとしない」妥協とも、異なるものだということである。そして、これらの言葉は、我々心理臨床家にとってもなじみのあることではないだろうか。

6. 心理療法の視点

辻（2008）は、自分が忌避したくなるようなネガティブな体験や葛藤を苦痛を実感しながら内包することができることを、心の成熟としている。葛藤を排除し、他者や他のせいにして、攻撃したりしては心の成熟は滞る。後者のような人のそばに、葛藤を関係の中で抱える意義を知って、実行できる他者（治療者）が存在し、その他者が自分にも沸き起こるネガティブな体験をそのまま受容することができていると、本人も葛藤をもってつぶれなかった自分を体験することが可能となり、自負心が生まれ、主体的に問題に取り組むことが可能となると述べ、他者（治療者）の姿勢についても言及している。セラピストにとって、クライアントの状況で、相容れない二つのものが同時に起こるような葛藤が生じた場合は、クライアントの成長のチャンスにつながる重要な局面であると、考えられるわけである。

また、河合（1986）は、心理療法において、セラピストの受容が真の対決を生む様子を明らかにしている。例えば、自身の父親を攻撃し、死んだほうがまだ、と訴える大学生のクライアントの話をセラピストが聴き、セラピストがクライアントの憎しみや怒りを真に受容すると、クライアントの心の中には全面的に覆っていた憎しみの感情を平衡状態に戻そうとする力が働く。それは、セラピストの受容の後、沈黙し、「…しかし、私の学費は父が出してくれているのですが…」といった言動によって表れる。つまり、セラピストの受容によって、クライアントの意識の中に潜在化されていた事実が浮かび上がり、父への憎しみと学費を出してくれている父への感謝の念との間で、強い対決を内的に体験しなくてはならなくなっている、と言及している。ここで、逆に、父親を憎む学生に、父親に感謝すべきことを説く人が現れた場合には、学生は反発し、そこに表面的な「対決」が生じているように見えるが、先の「対決」とは質が全く異なっている。説得する側には学生の道徳心の低さを攻撃する点において、自分の優位性を信じていて、そこには対等の関係がない、と指摘する。学生の方も、相手の理解のなさを攻撃することで、自分の優位を信じていることが考えられる。お互いに相手を非難することによって、自分の責任の所在をあいまいにしている、同一の地平

に立ったものではなく、どちらも自分の主体的な関わりを避けていることを述べている。さらに、受容し難いことをいかに受容するかというセラピストの心に生じる対決の重要性も強調している。セラピストの心にクライアントを非難したくなるネガティブな心が芽生える時、自分の優位性のみ信じているところには、内的な真の対決は生まれえない、ということである。クライアントの心にも対決は生じない。外面的な対決のようなものが現れるだけである。受容という行為は、厳しく苦しい作業なのである。

また、Jung (1921) は、現実を人が主観的に把握する際の心の固有の生命活動をファンタジーと呼び重視し、「ファンタジーが現実を創造する」こと、ファンタジーとは、「あらゆる可能性の母」であり、「常に相容れない、合意し難い、和解できない要求に橋を架けるもの」であると主張している。ファンタジーは、現実の実現の仕方や創作活動によって表現される場合が多い。心理療法は、フラスコの中にセラピストとクライアントが入り、熱を加えて化学変化が起きることを期待する営みだというように比喩的に表現されることがある。現実的な解決方法が見つからず、手詰まりになって来談したクライアントとセラピストが同じ器の中に入る、クライアントの様々な未処理なもの、葛藤、事情、セラピストの様々な事情が、一つの器に入り、セラピストが器に責任を持つ、そんなイメージだろうか。時間をかけていく中で、化学変化が起きるのを待つ。それはあらかじめ予想されたものではなく、自律的に変容していくものだろう。時々このような比喩を思い出させる心理療法プロセスに出くわすことがある。定期的に会っているクライアントが、面接の日ではない時に、偶然にも大切な出来事が起こったり、重要な他者が現れたりして、そのようなことが面接で語られる。すると、次の回にもまた新たな出来事が生じて語られる。あるいは、「昨日見たのですが」と夢を語り、その夢のイメージに驚かされる場合もある。描画や箱庭によるイメージ表現のこともある。いずれにしても、クライアントの内界と外界が呼応しながら、自律的に動き展開していく様子を目の当たりにするのである。そういう時は、目には見えない器が働いていると実感できるわけである。

新型コロナウイルス感染症は、人間の圧倒的な非対称性によって生まれた。しかし、このことの議論がなされるのはほんのごく一部の場面で、多くは疫学的な観点、知見から、感染を抑えることに主眼がおかれている。これもまたコロナウイルスをコントロール下に置こうとする非対称的な見方だと思われる。だから「コ

ロナに勝つ」という表現がなされる時、筆者は違和感を感じる。川を自分たちの都合だけで工事をして壊したり、美しい川原に空き缶やお菓子の袋を捨てたりする行為と根本は同じなのではないか、と感じる。それは、「他県の人はお断り」という心や他者を拒む心ともつながっているだろう。そして、筆者自身にもそのような人の心に対してネガティブなものが生じている。自分の優位性だけを信じて、他を批判するのではなく、それら全てをひっくるめて、その上で競争、対立、矛盾、尊重のある「バランス」を器の中に入れる、自らも入ることが、これから必要になってくるのではないか、という考えに至った。

7. 終わりに

新型コロナウイルスの影響下で、様々なことが個人的に起こった。偶然に見た山極氏の新聞記事、なんとなくつけたテレビで出くわした馳氏やC.W.ニコルに惹きつけられた。それによって著書にも出会った。釣り仲間の川原先生と橋本先生と釣りに行けるか行けないかで様々な話し合いをした。妻とも議論を交わした。中沢新一はすぐに頭に浮かんでいた。その他にも、大学のケースカンファレンスのあり方やオンライン授業、10月の久しぶりの対面授業、Zoom体験、家族、などいろいろなことを味わった。7月の釣りと8月の山登りを中心に、私が偶然出会ったり、直面したり、私にちりばめられたコンステレーションだと考えている。それぞれがなんとなく自分にとって“重要な何か”だと直観はしていた。ぼんやりと配置していた。それらを今回、少し言葉にできたように思う。

コンステレーションは、ユング心理学で扱われる重要な概念であるが、筆者にとっては、河合隼雄の最終講義での説明(河合, 1993)がわかりやすく参考にしている。コンステレーションは、元は星座を意味し、一見関連のないものに非因果的な配置を読むことによって現れるものである。最終講義では、クライアントの心の奥底にあるかたまりやしこり、イメージや出来事、症状などに対してセラピストが「どういうことがコンステレートしているのか」という背後の可能性を読む態度でいると、クライアントから様々な語り、一見関連がないような語りやなされ、おもしろいけど全体的な意味に到達することがあるとして、その重要性が述べられている。さらに、コンステレーションを読むという行為が「現象の中に私が入る」ことにも指摘している。例えば、問題を抱えるクライアントに、どんなことがコンステレートされているかという態度によって、様々な語りを聴くことになり、聴い

ているセラピスト自身にとっての意味、取り組むべき課題との関連に気づく場合があり、それらが不思議に配置されて、全人的な関わりになってくる。クライアントの問題を客観的に捉えて、改善しよう、というのではなく、セラピスト自身の生き方にも関わってくる場合がある、というのである。コンステレーションを読むという態度自体が、C.W.ニコルの「バランス」や黒川の「共生」とも深く関連していると言うことができる。本論文で注目してきた、流動的知性、物語的知性、内的なムーヴ（動機）は、自然や人と対称性の関係の実現を可能にし、異なる存在を飛び越える、分かれた壁を通過することと深い関係がある。そしてそのことは、競争、対立、矛盾、葛藤という一見相容れないもの同士が関わることで新たな創造を生む「バランス」やコンステレーションを読む臨床態度を支えるものでもある。

新型コロナウイルスの影響を受ける中で、ほんやりと受けてきたもの、山に行きつづけてきたこと、出会った様々なもののコンステレーションを眺めることで、筆者自身にとっての意味に近づくことができたように思う。人間は酷いこともするが、先人達には偉大なことを成し遂げてきた人達もいる。そして自分もまた同じ人間である。これまでに味わったことのない課題に向き合うことになるのであろう。最後に心理療法の視点に戻ってきたのは、昔話の「ネズミの嫁入り」を思い出した。足元をしっかりと見よう、目の前のクライアント、目の前の教育場面、臨床場面にこそ、できることはあるのだと思われる。

註1)：直木賞作家・馳星周「中年になったから書けた」NHKニュース。引用はWEBニュースの同じ内容の記事から行った。

註2)：「『“新型コロナ時代”をどう生きるか』C.W.ニコルの遺言」を紹介したNHKニュース。引用はNHKインターネットサービスから行った。

文献

- C.W.ニコル (1991). TREE. アニメージュ文庫.
馳星周 (2020). 少年と犬. 文芸春秋.
河合隼雄 (1986). 心理療法における「受容」と「対決」.
心理療法論考. 新曜社.
河合隼雄 (1992). 心理療法序説. 岩波書店.
河合隼雄 (1993). 物語と人間の科学. 岩波書店.
黒川紀章・C.W.ニコル (2001). 日本まさに荒れなんとす. 致知出版社.
中村靖彦 (2001). 狂牛病—人類への警鐘—. 岩波書店.

- 中沢新一 (2002). 熊から王へ—カイエソバージュⅡ. 講談社.
中沢新一 (2004). 対称性人類学—カイエソバージュⅤ. 講談社.
高橋幸治 (2014). 事例研究における“個から普遍へ至ること”の意味. 臨床心理身体運動学研究, 16 (1). 39-49.
高橋幸治 (2017). たましいの探求と物語. 中島登代子 (編). 心理臨床の第一歩—こころの臨床ファンダメンタル. 創元社. 34-38.
辻 悟 (2008). 治療精神医学の実践—こころのホームとアウエイ. 創元社.
Jung, C.G. (1921). Psychologische Typen. GW6. Walter-Verlag, 1960. § 78. タイプ論. 林道義訳. みすず書房. 1987. 60-61.
山極寿一 (2020). シリーズ疫病と人間. 毎日新聞 2020年4月28日.

(2021年1月26日受稿, 2021年2月3日受理)